

フウセンクラゲモドキ



久保田 信

3



冬季の北寄りの風で白浜に吹き寄せられてくる外洋性クラゲ類の中にめったに採取できない種類が見つかることが

ある。11月21日に瀬戸漁港で発見したのがフウセンクラゲモドキである。年に1個体とれるかどうかの希少種だ。

このクラゲは普通のクラゲ類ではなく、クシクラゲ類に属し動物門が異なる。クシクラゲ類の大きな特徴は、体を縦に走る8列の筋。これは櫛板(くしいた)列と呼ばれる運動器官である。化石種を除いて、地球上に生きているどの種類も8という数で統一されている。筋上には複数の板

状のものがあって、それらを前後に振ることによって移動する。推進装置の最小単位が櫛板で、繊毛が融合して1枚の薄いセロハンのようにになっている。繊毛の長さには、多細胞動物中最長で数ミルもある。この櫛板に光が当たると美しい虹色に輝く。

本種は、一見するとフウセンクラゲモドキの持つ刺胞を取り入れて使うフウセンクラゲモドキ

ウセンクラゲという通常種に類似している。決定的な違いは触手の形が櫛状でなく糸状をしており、その中に餌をかため捕る膠胞(こうほう)ではなく、毒針を仕込んだ刺胞がある点である。

普通の小型のクシクラゲ類は膠胞をとりもちのように使って餌を捕らえる。しかし、フウセンクラゲモドキはのみ込んだヒドロクラゲ類が持っていた刺胞を自身の触手に装填(そうてん)し、餌を捕ったり、護身に使ったりする。これを盗刺胞と呼び、この行為はウミウシ類が有名である。

フウセンクラゲモドキは全長5ミリほどになるが、この個体はまだ小さく1・3ミリほどしかない。日本で本種が最初に記載されたのが田辺湾からである。京都大学瀬戸臨海実験所(白浜町)初代所長の故駒井卓博士と7代目所長の故時岡隆博士が共著で1942年に報告している。

(京都大学准教授)